

令和元年度病害虫予察情報・特殊報第2号

令和2年2月19日
鳥取県病害虫防除所

1 病害虫名 ネギハモグリバエ（別系統）
Liriomyza chinensis Kato

2 作物名 ネギ

3 発生経過と概要

- (1) 令和元年10月に境港市の露地ネギほ場において、従来のネギハモグリバエ（以下、A系統とする）の被害とは異なる症状（図1）が確認された。
- (2) この被害株から採取したネギハモグリバエについて、農業・食品産業技術総合研究機構 野菜花き研究部門 野菜病害虫・機能解析研究領域に同定依頼したところ、遺伝子解析により、A系統とは異なる別系統（以下、B系統とする）と同定された。
- (3) B系統の確認は、本県では初めてである。また、B系統は、平成28年に京都府で初めて確認され、以後、茨城県、富山県、千葉県、長野県、埼玉県、新潟県、栃木県、三重県、滋賀県、大阪府、愛知県、東京都、佐賀県及び岐阜県の計15都府県で発生が確認されている。

4 発生生態

(1) 生態と形態

両系統ともに成虫が葉の組織内に産卵し、ふ化した幼虫は葉の内部に潜り込み葉肉を食害する（図2）。幼虫は成長すると葉から脱出し、地表又は土中で蛹となる。

また、形態による両系統の識別は困難である。両系統とも成虫の体長は約2mm、胸部と腹部は黒く、その他の部分は淡黄色である（図2）。幼虫はうじ虫状で、成長すると体長約4mmに達し、蛹は体長約3mmの褐色、俵状である。

(2) 被害

B系統はA系統と比較して、1葉あたりの幼虫数が多い傾向にある。初期の食害痕は、A系統と同様に不規則な白線状であるが、進展すると近接した食害痕同士が癒合し、葉全体が白化したようになる（図2）。

5 防除対策

- (1) ネギハモグリバエ又はハモグリバエ類に適用のある薬剤を使用し、発生初期の防除を徹底する。
- (2) 被害葉及び収穫残渣は本虫の発生源となる場合があるため、ほ場に放置せず、1か所にまとめて積み上げ、ビニル等で覆い、裾部分を土で埋める等、適切に処分する。



図1 幼虫による葉の食害
(境港市においてサンプルを採取した葉)

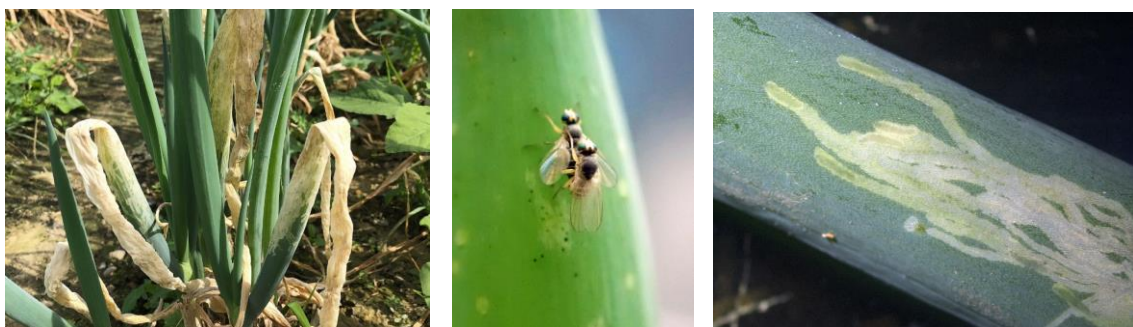


図2 ネギハモグリバエ
(左：集中加害されたネギ、中：成虫、右：幼虫の食害)
写真提供は徳丸 晋氏（京都府病害虫防除所）